

目次

十二の奇妙な物語

5

訳者あとがき
267

十二の奇妙な物語

西暦一九二〇年のある日、ごく限られた会員だけの、特殊なクラブが発足した。よそのクラブのよ
うな入会金や寄付金はなく、会員は、俳優、弁護士、医者、一市民、軍人、作家の六人のみだった。
平凡な一般人である一市民以外は、それぞれの職業で名声と呼べるものを得ていたため、会員名簿に
は便宜的に、メンバーの職業がアルファベット順にのせられた。さらに会員たちは、この順番で、ク
ラブにおけるただ一つのルールを、実行しなくてはならなかった。皆の合意を得た晩に、順番の来た
会員は、残りの会員に、とびきり上等なディナーをふるまう。そして食事のあとで、職業に応じた話
——お客が居眠りをせずにすむような、興味深い話——を披露する。

お客を起こしておけるような面白い話ができなかった場合、問題の会員は、クラブの唯一の罰則に
従い、しかるべき慈善団体に十ポンドを寄付しなくてはならない。

食事の質についてのルールは必要ないと見なされており、会員が自由裁量で選んでいた。

第一話 俳優の話 キルトの布きれ

「私の商売の困った点は」俳優は話し始めた。「最も偉大な芝居は決して上演できない、ということだ。それでは金は稼げない。大衆は筋のある話——山場を求めている、山場が終わると、役者は気取るのをやめ、幕がおろる。しかし、人生には——実際の人生には筋などなく、パッチワークキルトのように、期待はずれのできごとの連続にすぎない。あまりにもあつけない結末がおとずれ、キルトが終わりを告げるまで」

俳優は若白髪のままじつ髪に手をすべらせ、しばらくの間、じつと火を見つめた。軍人がパイプに煙草をつめ、作家は足を前に投げ出して、ズボンのポケットに深く手を突っこんだ。

「私が語るのは、そうしたキルトの布きれの一枚についての物語だ」俳優は考えにふけりながらあとを続けた。「女の人生における一エピソード。いやむしろ、あるエピソードの中の、女の人生と言わなければならないね。」

私の出演した、『ジョン・ペンデルシャムの奥方』を覚えているかい？」俳優が弁護士のほうを向いてたずねると、弁護士はうなずいた。

「とてもいい芝居だった」弁護士は言った。「モリー・トラバースは、劇団の看板女優だな」「イギリスを離れていたんでな」軍人が言う。「見られなかったんだ」

「たいしたことじゃないさ」俳優は煙草に火をつけた。「芝居そのものは私の話と直接関係はないからね。だが、きみが見ていないと言うなら、これだけは説明しておかなくちゃならない。むろん私がジョン・ペンデルシヤムを演じ、モリーは私の妻役だった。そして私に言わせれば、第三幕でのモリーの感動的な演技は、あの名女優の役者人生の中でも最高のものと言えるだろう」

作家がうなずいた。「ああ、彼女は実にすばらしかった」

「毎晩幕がおりると、モリーは今にも気絶せんばかりになっていた。毎晩息をのむ静寂のあとに、割れんばかりの拍手が続いた。私がこうした周知の事実を話すのも、モリーの名演技が私の語る物語とかわりがあるからだ——芝居そのものは関係がなくてもね。

私の物語が幕をあけたのは、一か月ほど公演を続けたころだったと思う。三幕を終えた私は、楽屋へ向かっていた。わけあって、舞台から直接楽屋に通じるドアは使わず、外の通路に出た。そこには、大道具やら何やらを運ぶ者たちがいた……。

きみたちは皆、劇場の裏口に来たことがあるだろう。まず、道から中へ通じるスイングドアがあり、ドアの内側には門衛がいて、訪問者の用件をたずねる。それからまた別のドアがあり、そこを入ると私の楽屋におりる三段の階段がある。その夜、楽屋のドアをあけようとした私は、ふと、まわりを見まわした。

三つある階段のてっぺんに一人の女が立ち、じっとこちらを見つめていた。すぐに門衛が割りこんできたので、彼女を見ることができたのはほんの一瞬で、私は部屋の中に入った。しかし、ごく短い時間とはいえ、彼女の姿を見ることができた。彼女の瞳の中にある表情を、読み取ることができらうらいには。

想像がつくだろうと思うが、劇場の裏口にはあらゆる種類、あらゆる境遇の人間がいる——女優志望の若い娘、仕事にあぶれた俳優、サインをほしがる者、物乞い。そして門衛は、二番目のドアを入ることができるのは私の個人的な友人か手紙で約束した者だけという、不動のルールを心得ていた。しかし、どんな時でもそうと決めることなど、できはしなかった。

ああ！あの夜から何年もたつというのに、私は彼女の瞳の中にあるメッセージを、昨日のこのようにはつきりと感じ取ることができず。希望と、恐れと、痛々しいばかりの懇願。それは、最後の渾身の一撃にすべてを賭けようとする者の目であり、子供のために戦う母親の目であり、私には理解できそうもない、驚くべきものだった。私はドアのすぐ内側に立ちつくしたまま、彼女が若いのか年取っているのか、美人なのか不器量なのかもわからずにいた。にもかかわらず、あのほんのわずかな短い時間で、あれこれ入りまじった彼女のメッセージが、はつきりと私の心に届いたのだった」俳優は煙草をおしつけて消し、別の煙草に火をつけたが、沈黙を破る者はなかった。

「しばらくの間、私はためらった」俳優は少しあとで続けた。「それから私はベルを鳴らして、門衛を呼んだ。

『さっき部屋の外にいた女性は誰だ？』門衛が入ってくると、私はたずねた。

『名前はおっしゃいませんでした』門衛は答えた。『あなたに会いたがっていました。規則についてお伝えしました』

私は再びためらった。たぶん私は、ことを大げさにとらえているのだ——彼女の表情を、完全に読み違えているだけなのだ。きっと彼女もほかの者と同じように、仕事を探しているだけだというの。だがその時私は、あの女性に会わねばならないということ、彼女の話を聞くまでは、心の平安は得ら

れないということを悟った。門衛は、不思議そうにこちらをながめていた。いったいどうして私がためらうのか、わかっていないのは明らかだった。扉を守る番人である彼は、実際の男だった。

『中へ通してくれ。今すぐに会う』私は門衛に背を向けたが、実直な彼が、怒っていることはわかった。なんといつても、ルールはルールなのだから。

『今すぐにですか？』門衛は聞き返した。

『ああ、すぐにだ』

門衛は出て行き、階段をのぼる音が聞こえた。

『トレイン氏がお会いになるそうです。こちらへ』

そして、再びドアが開くと、私は向きを変え、あの女性と顔をあわせた。彼女は若かった——とても若く、安物の田舎じみたドレスのようなものを着ていた。靴もかつては上等だったのだろう——どんなにたくみにつきをあてようと、つぎがあたっていることには変わりなかった。手袋にはたくさんの針と糸のあとがあり、ちっぽけなバッグはこすれてぼろぼろだった。安っぽくあかぬけないドレスの上に、着古してすり切れたコートを着ていた。

『ミスター・トレイン、会ってくださいと、ありがとうございます』

おどおどと声が少し震えていたものの、彼女はこちらをまっすぐに見て言った。

『こんなことはめったにしないのですが』私は言った。『あなたが階段の上にいるのが、見えたもので……』

『めったにないことなのは、承知しています』彼女は私をさえぎった。『外にいる方から、規則については聞きましたから。ですが』このころには、彼女は少し自信を持って話すようになっていた。

『お嬢さん』私は静かに答えた。彼女は二十をいくらかも超えているようには、見えなかった。『私に何をしてほしいのか、まだおっしゃっていませんよ』

『ケンジントンの私の家まで、一緒に来てほしいんです』彼女はきつぱりと言った

俳優はまた一息ついて火を見つめると、短い笑いをもらした。

「彼女がそう言った時、私は彼女をかなり鋭く見やっていた。うぬぼれだのなんだのでなく、魅力的な女性からある種のコびるような感情を向けられることは、生涯の中でたまにあることだ。つまりその——妻には隠しておこうと思うような感情、ということだが」

「ああ」一市民がつぶやいた。「確かにね」

「一瞬、これもそういうことなのかもしれないという考えが、心をよぎったのを白状せねばならない。彼女が頬に血をのぼらせて真っ赤になったので、ようやく私は自分が誤解をしたばかりか、うかつにも、その誤解を彼女に見すかされてしまったと悟ったのだった。

『まあ、どうしましょう！』彼女は小声で言った。『そんなはずはありませんよね——あなたはまさか私が……』

彼女は腰をあげ、私の前で小さく身を縮めんばかりだった。

『いや、私は結婚していませんから』私が無言で考えたことの愚かしさを、はっきり証明するものとして彼女が思い描いていたのは、そんな言葉ではなかっただろうが、私はあえて目をそらした。私はただ頭をさげ、いささか堅苦しい口調で言った。『すぐに結論を出さないでください。なぜ私に、ケンジントンの家まで来てほしいのか、聞いてもいいですか？』

彼女の頬から赤みが消え、彼女は再び腰をおろした。

『それだけはお話しできないんです。あなたが来てくださるまでは』彼女はひどく低い声で答えた。『馬鹿げていると思われるだろうことも、必要もないのに秘密めかしているように見えることも、承知しています。でも、だめなんです、ミスター・トレイン。どうしても話すわけにはいきません……今はまだ……』

呼び出し係がドアをノックし、私は最後の幕を続けなくてはならなかった。ある意味、私は愚かだったのだから、人生は衝動で成り立っている。告白すると、私は一連のできごとに、興味をそそられていた。会いにやってきた女性が、初日から毎晩、自分の芝居を見ているのだと言う。そのため昼食を抜かなくてはならないが、それはあるすばらしい計画のために必要なことなのだと言う。そして、ケンジントンの家まで、一緒に来てほしいのだと言う。どんなに好奇心のない男でも、心を動かされるはずだし、私はほんの子供のころからいつも、他人のあれこれに夢中になっていた……。

『わかりました』私はぶつきらぼうに言った。『ご一緒しましょう』

その時、私は手を差し出して、彼女をささえねばならなかった。彼女が気絶するのではないかと、私は思った。当時は反動が来たのだろうと思っていたが、あとでもっとずっと平凡な理由——栄養不足のせいだとわかり、私は衝撃を受けた。

私は彼女がもとに戻るまで、しばらくそこにとどまり、外で待っていてほしいと言った。

『三十分ほどかかります』私は言った。『それからタクシーをひろって、ケンジントンまで行きましょう。椅子を出すよう、言いつけてください……』

舞台へと向かった私が最後に見たのは、テーブルをつかみ、大きな茶色の瞳に勝利のきざしの色を浮かべて、じっとこちらを見つめている、若い女の白い顔だった」

「私が思うに」俳優は、思案顔で続けた。「そこにこそすべての悲劇があったのだと思う。あとで彼女は、自分の計画の最も難しい部分は、私にケンジントンまで一緒に来るのを承知させることだったと言っていた。それさえできればすべてうまくいくと、彼女はかたく信じきっていた。私が四幕へと向かった時、彼女は自分の努力が十分にむくわれて成功するのだと思い、これまでしてきたことにくらべれば、これから来ることなど、何ほどのものでもないと思っていた。難攻不落の砦は猛攻を受け、鬼は子羊だと証明された、というわけだ。

そして私たちはケンジントンへ行った。私の車は家へ帰して、タクシーをひろった。ドライブの間、彼女は極端に口数が少なく、私も彼女をしゃべらせようとはしなかった。彼女が運転手に告げた住所に着くまで、この謎めいた計画の一端があかされることはないのは、明らかだった。着いたのは、聞いたこともないへんぴな通りで、名前もすっかり忘れてしまった。ペーカー街からそう遠くない場所だったのは確かだ。

とげとげしい顔つきの女がドアをあけ、私をうさんくさげにじろじろと見た。しかし、彼女が女をわきへ連れて行って耳に何かささやくと、明らかに期待どおりの効果があり、私たちは玄関ホールに取り残された。ゴルゴンがうなりながら臭気を放つ地下室に引っこんだかのようだった。

女がドアを開めると、彼女は私のほうを向いて言った。

『ミスター・トレイン、上へ来てくださいませんか？ 夫に会ってほしいんです』

私がおじぎをし、『もちろんです』と答えると、彼女は私を案内した。

『では夫も、計画とやらに一枚かんでいるわけだ』彼女のあとについていきながら、私は考えた。夫は芝居の天才で、私に朗読でも聞かせようというのだろうか。天才の芝居には、前に苦勞したことが

〔著者〕

サッパー

本名ハーマン・シ ril・マクニール。1888年、英国コーンウォール州ボドミン生まれ。チェルトナム・カレッジを卒業後、士官学校へ入学し、1907年に英国陸軍工兵隊少尉となった。軍務と並行して創作活動を行っており、15年には“Reminiscences of Sergeant Michael Cassidy”を故国の日刊紙《デイリー・メール》に発表している。第一次大戦後、正規軍を退いて予備軍少佐となり、本格的な作家生活に入った。1937年死去。

〔訳者〕

金井美子（かない・よしこ）

東京生まれ。東京女子大学文理学部卒。英米文学翻訳家。主な訳書に、ハーバート・ヴァン・サール『終わらない悪夢』（論創社）、ローズマリ・エレン・ダイリー『悪魔と悪魔学の事典』、ミリアム・ヴァン・スコット『天国と地獄の事典』（ともに原書房。共訳）など。

じゅうに きみょう ものがたり

十二の奇妙な物語

——論創海外ミステリ 241

2019年9月20日 初版第1刷印刷

2019年9月30日 初版第1刷発行

著者 サッパー

訳者 金井美子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1870-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします